

2022.6.20

ご報告：6/18 第 34 回働学研（博論・本づくり）研究会

十名 直喜

蒸し暑さが一気に増し、心身へのケアも大切なこの頃、如何お過ごしでしょうか。

6/18（土）に第 34 回働学研月例会が開催され、3 時間余（14 時前～17 時過ぎ）にわたり白熱した議論が交わされました。

折しも、文化資本アカデミー公開セミナー（市民大学院主催）6/18-19 の開催とぶつかり、そちらに参加された方も少なくありません。働学研主宰者（十名）も、6/19 には丸 1 日参加し、発表（「働学研は人生を豊かにする」60 分）させていただくなど、ハードな 2 日間でした。

そうした中、月例会にご参加いただきました下記 21 名には、心よりお礼申し上げます。（敬称略：井手、井本、太田、小野、片山、熊坂、小林、佐藤、澤、高松、田中、程、冨澤、中野健、中野正、波多野、濱、平松、堀、横田、十名）

第 34 働学研は、2 部編成で各 3 本ずつ 6 本の発表がありました。

第 1 部 歴史と哲学に学ぶ日本の経営と未来（司会：濱）

第 2 部 日本企業の人材育成・品質管理と連帯経済への道（司会：太田）

開催にあたり冒頭で、6 月に満 90 歳を迎えられた小野満さんの卒寿記念講演が行われ、感銘深いひと時を享受することができました。

6/18 第 34 回働学研プログラム

（司会：太田・濱・十名、画面：澤 & 発表・議論各 15 分：計 30 分/本）

第 1 部 歴史と哲学に学ぶ日本の経営と未来（司会：濱）

小野 満：卒寿記念講演「未来を考えるために過去を振り返る ー戦争と平和」

中野健一：「『日本経営学の成立』再論 ー十名[2019]『企業不祥事と日本的経営』からの学び」

平松民平：「『サステナビリティの経営哲学』に触発されて」

第 2 部 日本企業の人材育成・品質管理と連帯経済への道（司会：太田）

小林伸孝：「コロナ禍給付金申請で再確認された中央会企業組合部会の役割と論点 ー企業組合法制化と社会的連帯経済法の道筋へ」

片山勝己：「企業内学校の変遷と日本的特徴 ーグローバル視点からの教訓と課題」

堀 隆一：「日本企業の品質不正と全体総括」

各位の発表と議論については、<付記 1 発表&議論のポイント>をご覧ください。実に興味深い議論がなされています。電子メールでの深いコメントも紹介しています。

なお、次回の7/23第35回働学研などについては、**<付記2 7、8月働学研のお知らせ
とお願い>**をご覧ください、

どうかよろしくお祈いします。くれぐれもお大事に。

<付記1 発表&議論のポイント>

小野満さんの発表は、半世紀を超える俯瞰的な視点から、ウクライナ戦争と日本の軍事侵略を問い直し、未来へのメッセージさらには長寿の極意を披露されたものです。レーニン『帝国主義論』との比較視点の重要性。英米系石油メジャーの市場再分割戦略、覇権国家の交代期と米国主導の新冷戦戦略。国連の役割、国際平和のあり方、人間論、など議論。

中野健一さんの発表は、中野[2020.12]『日本経営学の成立』の洗練化に向けて、十名[2019]『企業不祥事と日本的経営』に切り込み、光と影、立体化、図式化の大切さに注目されたものです。日本的TQC（品質管理）と伝統的な商人道との比較。強みが弱みに転化する歴史的・社会的メカニズム、立体化における空間軸の捉え方、人間の内的変化などを議論。

平松民平さんの発表は、十名[2022]『サステナビリティの経営哲学』の物質代謝論、生産力論に切り込み、「地球の有限性」（十名）と「情報生産」（平松）の視点から『資本論』を問い直されたものです。「非物質代謝」とは何か、巨大な物質循環の地球において存在するのか。「情報生産は非物質代謝」？ 無形とは何か。情報・生産力・所有、等を議論。

小林伸孝さんの発表は、企業組合法制化のもと、コロナ禍給付金をめぐって顕在化した規定のあいまいさ、企業組合「中央会」（法制）と「部会」との関係にメスを入れ、社会的連帯経済の視点から問い直されたものです。企業組合の分散型と集中型比較。先行研究（社会的連帯経済論、労働者協同組合論等）に学び、到達点と課題を明らかにすべし、等議論。

片山勝己さんの発表は、企業内学校論の各種原稿（20万字弱）を体系的にどう編集するかについて、この間における働学研での議論をふまえ、発表されたものです。大きな筋がない、何を言いたのか？ 等の厳しい指摘も。時間軸と空間軸の視点から整理してはとの提案。社会化（欧米）の先行研究に学び、企業内（日本）との比較を深めては！等を議論。

堀隆一さんの発表は、堀[2021.4]『日本の勤勉・勤労思想の系譜』の発表6回をふまえ仕上げ版を提示されたものです。マズローの5段階欲求発展説の視点からの、労働時間と生活時間の歴史的変遷提示は、白眉。25歳以上学士にみる日本の低さ2.5%（国際平均16%）に警鐘。日本の労働生産性の低迷と賃金停滞の悪循環をどう打破するか、等に議論白熱。

メールでの感想・コメント

小野満さん「戦争と平和」について（波多野進 2022.6.18）

本日はありがとうございました。いつものことですが、これほどまでに多様なそれぞれのご発表に、的確にコメントされ、時には迷路に道標をお示しになり、時には真正面から対論される十名先生のお裁きはたいへんなものです。頭が下がります。

本日は、一点だけ、小野満さんの講話「戦争と平和」についての感想を添付します。

「背筋を伸ばして拝聴しました。この前の戦争末期に誕生した私にはもちろん戦争の実記憶はありません。肉体的記憶がないものには本当の悲惨さは伝わらないといわれればそれまでで、それは戦争に限らないでしょう。いや「戦争に限らない」と簡単に言うとこれはお叱りを受けそうです。

しかし、さらなるお叱りも覚悟で敢えて申し上げますと、戦争（同種内の殺戮）はホモ・サピエンスの宿痾ではないでしょうか。この地球上にホモ・サピエンス同士が殺戮し合わなかった時代はなかったのではないのでしょうか。他の生物は、同種の相互殺戮を避け得たものだけが今に生き延びているのですが、人間はそれとは違って、同種内で殺戮を繰り返しつつ、地球上に最も繁栄してきた特異な生物です。「戦争すること」はほとんど「人間であること」と同義であるかのようです。よくグレート・ジャーニーなどと呼ばれるようにホモ・サピエンスが全地球上に拡散したのも、この殺戮を逃れる行動ではなかったかと妄想しています。

言いかえると、人間にとって、戦争が常態（当たり前）の姿で、平和は常態ではないということです。長く続いた *pax romana* は、「平和」といいながら、その外延境界に戦争をはらみ、内部には奴隷同士の殺戮をショウとして含んでいました。それを考えれば、江戸時代は、ローマと同じくらい長期に、しかし持続的な殺戮を含まないほとんど例外的な「平和」を実現していた奇跡の時代だったかもしれません。

人類学者の報告によれば、前近代的社会を現代まで維持してきたいくつかの小さな社会がありますが、そこには、ある範囲での孤立、および集団内での人為的人口調節機能を含むという共通点があるようです。江戸時代の日本も、いわゆる「原始社会」とは比較にならないくらい巨大でしたが、やはり持続的な「人口調節機構」を持っていた孤立社会でした。

これ以上は話が広がりすぎるのでやめますが、小野さんの平和への希求とそのためのご提案は貴いお志とお聞きした上で、しかも、相互不可侵の約束など、あらゆる手段をつくすことに何ら異議を挟むものではないとしながら、しかし、そのような約束が長く守られるはずがない、われわれは何らかの人為的な工夫で平和が実現する可能性がある等と人間性に幻想を持つべきではないと、だけ付け加えます。」

<付記 2 7、8 月働学研のお知らせとお願い>

なお、7 月以降の発表申し込みも受け付けています。

7/23 働学研には、2 名から発表の申し込み（仮題）をいただいています。

中野健一：「『日本経営学の成立』再編への視座」

高松平蔵：「ドイツのシビックプライド ―市民社会の基礎概念として」

ご発表、ご参加のお知らせ、お待ちしております。十名（tona@iris.eonet.ne.jp）までお知らせください。